

(能)

# 放下僧

ツレ 中村 清  
シテ 藪 克徳

大鼓 飯嶋六之佐  
小鼓 住駒 幸英  
笛 江野 泉

間炭 光太郎

後見 広島 克栄  
木谷 哲也

地謡 寺田 茂 佐野 玄宜  
水口 純治 渡邊 茂人  
浅谷 之信 高橋 憲正  
田屋 邦夫 佐野 弘宜

休憩 二十分

(仕舞)

# 養老

佐野 由於

地謡 高橋 憲正  
渡邊 荀之助  
広島 克栄  
佐野 弘宜

(狂言)

# 清水

太郎冠者 清水 宗治

主人 中尾 史生

後見 山田 讓二

(能)

# 羽衣

シテ 松本 博

ワキ 苗加登久治

大鼓 田中 一義 太鼓 飯森 友春  
小鼓 多田 順子 笛 矢郷由香子

ワキツレ 平木 豊男

ワキツレ 渡貫 多聞

後見 松田 若子  
福岡 聡子

地謡 高野 秀幸 島村 明宏  
船本 嘉人 藪 俊彦  
長野 裕 高橋 右任  
木谷 哲也 佐野 玄宜

## 能 放下僧 (ほうかそう)

放下とは遊狂の雑芸者のこと、僧形や侍姿で漂泊したと言われます。その放下僧・放下侍に扮した兄弟が親の敵を討つ話です。まず弟牧野の小次郎(ツレ)が出て仇討ちの決意を語り、殺生を洩る出家の兄(シテ)を説得します。親の仇を討たない不孝の思いが、結局は兄に仏戒を捨てさせました。二人は故郷の下野の国を出発します(中入)。その頃、相模の国の住人利根の信俊(ワキ)は、夢見が悪いのを不安がり、瀬戸の三島明神へ参詣します。折から境内では放下の芸にやんやの声。喜んだ利根の従者(アイ)が二人を招き寄せ、利根と兄弟の間で異形や宗体をめぐる禅問答が繰り返されます。さらに曲舞・羯鼓・小歌と続く芸尽くしには、仇討ちの主筋とは別に「室町ごころ」が堪能されるはずです。その間にも、冷静に隙をうかがう兄、血気にはやる弟、言い知れぬ胸苦しさに襲われる利根、と三者の心の葛藤が次第に緊張を高め、所願成就の結末を迎えます。

## 狂言 清水 (しみず)

野中の清水へはお茶の水を汲みに行きます。こんな仕事も自分にさせて、主人は人使いの荒いお方です。おまけに夏には蚊帳も釣ってもらえず、給料も滞りがちです。太郎冠者の思いついた小さな反乱は、清水に鬼が出て秘蔵の手桶を取られたと嘘を言うことでした。自ら清水に向いた主人を、鬼の面を掛けてさんざんに脅したまでは、胸のすく上々の展開でしたが、調子に乗って鬼の言葉をまねたときに、声と同じと気づかれてしまいます。

## 能 羽衣 (はごろも)

のどかな春の朝、好風で鳴る駿河の国三保の松原に漁夫白竜とその連れ(ワキ・ワキツレ)が上がり浦の景色を眺めていると、虚空に花が降り音楽が聞こえ、霊香漂う不思議な気配を感じます。ふと見ると近くの松に美しい衣が掛けてあります。白竜が衣を手にしたところへ女(シテ)が現れて、それは天人の羽衣だからといって元に戻すよう懇願します。白竜は末世の奇特を喜び、容易に返そうとしません。しかし天上を慕う天女の深い悲しみを見かねては、白竜も国宝にしたいとの執着を捨て、天人の舞楽を奏することを条件に羽衣を返します。羽衣を着た天女は霓裳羽衣の曲を奏で舞います。この時を始めとして、地上では東遊の駿河舞が伝承されたという事です。妙なる楽が大空に響き渡り、月宮殿の舞姫は散る花をかざし、霞に見まがう羽衣を翻して舞います。宝を降らし国土を祝福した天女は、十五夜の真如の月が照らすなか、富士の高嶺を経て昇天を果たします。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年六月二日(日)午後一時始

(能) 加茂

(狂言) 雷

(能) 歌占